
Metamor

MOR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e t a m o r

【Nコード】

N 8 0 7 7 0

【作者名】

M O R

【あらすじ】

好きになった男性と憧れの女性が同一人物だったら…。
きっと、百合話になるんでしょうね……。

突拍子も無いプロローグ（前書き）

色々と未熟過ぎますが
読んでいただけると嬉しいです。

突拍子も無いプロローグ

唐突ですが、転校することになりました。

家庭の事情、友人関係、要因は色々…

経験したことがある人は分って貰えると思うけど

どんな理由にしても、新環境への不安はありますよ。

友達できるかな？とか…

小学生並みの心配もしてみたりしています…。

「はぁ…。」

俺は生徒が一人も居ない静かな廊下から

ガヤガヤと静まらない教室に向かい溜息を吐いた。

溜息もそりゃ漏れますよ。

朝のホームルームが始まろうとしている最中に

担任の先生の合図でいち・にの・ほいで突入しなければいけないのだから…

「それでは転校生さん、入ってください」

不安が大半を占める、この胸のドキドキを抑えている中で

死刑宣告？　ありがちだけど、そんな宣告が俺に通達されました。

「ふう…。」

覚悟を決めて深呼吸、さっきの溜息とで十一ゼロ。

ガラッと微妙に建ってつけが悪いドアを開いて

俺は教室へと踏み込んだ。

「……」

一瞬にして静まる教室、そして注がれる視線。

何度経験しても慣れない、通常時に注目されるのはやはり慣れない。

「転校生の神沼和人君です、みんな仲良くしてくださいね」

呑気に言う担任は俺の気も知らないで

まだ、心の準備も整わぬ内にクラス全域へと俺の存在を知らしめる。

「……」

再び静寂に包まれる、あれ？これは俺が何か言わないとダメかな？

「えっと……転校生の神沼和人です、その……よろしく願いします」

無難過ぎる自己紹介を終えて、俺は浅く皆にお辞儀をした。

頭を起こすと同時に後頭部に少しの重みを感じる。

蛍光灯から垂れる電気のヒモの様に後ろで結わえた髪がそうさせたみたいだ。

慣れない、ポニーテール。

ああ……でも、ポニーテールって女の子の髪型だったけか男の場合……なんて表現すれば良いのやら……。

「以上でホームルーム終了です、神沼君は窓際の一番後ろ開いてるので、そこに座ってね」

先生に促され、俺は生徒たちの視線を集めたまま

一番後ろの席へと歩を進めた。

……………。

「ういっす」

高校生にもなれば転校生如きで騒ぐことも無いのか
絶世の美人が転校してこなければどうでもいいのか
クラスの面々は特に俺に対して興味を抱いてはいなかったみたい。

だけど、俺の席の調度前にあたる席に座っていた人物は興味深げに話しかけてきた。

何年来の友達に偶然町で遭遇したような感じで……

あ、俺の表現が曲解してたり適当だったりするのはスルーして欲しい。

頭の中で考えながら話してるのは疲れるんだ。

「神沼だっけ？ 俺、佐久間ヨロシク」

「え、ああ、よろしく」

爽やかに見せたいのであろう挨拶も

失礼だけど、2枚目半の彼の容姿から行くと……ちゃらい？ いや、失礼か

「それにしても珍しいよな、転校生が2カ月連続で来るなんてさ」
第一声しか交わしていないのに、俺に反応して欲しいみたいな言い方だ。

特に流される訳では無く柔軟に会話を合わせて行くのが無難？

「二か月連続？」

と聞き返す。

「ああ、ほら、お前の横に座ってる女子も先月転校して来たばっかなんだよね」

耳元で本人に聞こえない様に彼は言った。

俺はその言葉を聞き、流し眼で隣に座る女子を見る。

決して地味とは言えないが目立つ容姿でも無く……可愛いと言えるかと言えば可愛い方。

男子的判断はこれが正しいのか微妙だけど

とりあえず、良いところのお嬢さんって感じの人が読書に勤しんでいた。

「中々美人なんだけどさあ……かなりの人見知りさんらしくて話してくれないんだよね」

「へえ……」

心底どうでも良かった……が

背中まで伸びる長い綺麗な黒髪は良いね、良く手入れされていると見た。

憂いと言うか、軽く無表情に近いけど、多分読書に夢中なんだね。

「フラグ立てるなら今だよな？」

「いや、意味分らないんだけど……」

旗でも立ててお子様ランチでも食べるのだろうか？

フラグ？ フラグねえ……？

そう言えば昔、お父さんがそんなことを言ってたかも知れない。

男にとっては重要課題か何かなのだろうか？

「てな訳で、ほら、行って来いって」

ポンっと肩を叩かれた？

あれ？

「転校生同士、仲良くしましうねって感じでさ」

なるほど、俺に君が彼女と仲良くなるきっかけを作って欲しいと……

「自分で行けば良いんじゃない？」

「お前の為を思っているんだけど」

「？」

「転校初日は不安だろう？ だから早めに外堀……まあ、この場合

近くの席だけど、早いうちに埋めとくと後が楽だぞ」

うーんと……言っていることが少しも理解できないけど

早めに友人を作って置くことは悪くないかも知れない。

そうと分れば行動あるのみ。

隣の席の彼女に向かい声を出す。

「ちょっと良いかな？」

気さくに、フレンドリーに……ええと、こんな感じで良いのかサッパリ。

「……あまり良くないです」

あれ……目も合わせてくれませんでした。

「ほら……な？」

「……………」

やれやれと言った表情で前の席の…えーと、佐久間？

は俺の顔を見ていた。

外堀埋める作戦失敗。

「まあ、何だ。元気出して行こうぜ」

そう言っただけでも1時間目の授業の教科書の準備に取り掛かった。
既に……半分心が砕けそうです。

……………。

「うなれ！！俺のシャイニング○インガー！！！！」

勢いよく振り下ろされた手がネットにかかる。

3、4時間目は体育。

男子と女子で体育館を2分してバレーボールが行われている。

俺は急遽な転校だった為ジャージが用意できなかった為見学。

そして現状、佐久間が変な台詞を吐きながら派手に転倒し

クラスの笑い物になっているの図。

どうやら、彼のポジションはクラス内でのお調子者の様だ。

そんなの説明しなくても分るよね、空気で

「見てたか？俺の雄姿を！」

「ごめん、見てなかった」

彼は授業の合間に何度も話しかけてきた。

良い意味で俺をクラスに馴染ませようとしているのかもしれない

「って、神沼……お前女子の方ばっか見てんな……」

「い、いや……そんなことないけど」

男子がジャージなのに対して女子が体操着ってのはどうなんだろう
か…

しかも、下ブルマだし…今時、そんな学校PTAとかに問題視されるのでは？

「ブルマ…ああ、目の保養だよなあ、俺がこの学校選んだ理由の3

割は占めるぜ」

「でも、あれは流石に着れないよねえ……」

「ん？」

「？」

俺、変なこと言ったかな？

「お前案外変態なの……」

何故か残念そうな表情で言われた。

「えっ……！？」

「安心しろ……男は着たくても着れないから」

「あっ……だ、だよ。……ごめん失言」

失言ってレベルじゃなかったけど……どうなんだろう。

あれは……着れないよねえ……。

じゃなくて……！

女子の方を見てたのは深い意味は無いんだけどね。

隣の席の女の子が運動苦手なのか、あたふたと動いているのが気に入

なっただけ……。

身長は俺と同じくらい？ 165くらいかな？

女子では高い方だけど……あの動きじゃ戦力になってないよなあ……。

うん、それだけ。

……………。

サクサクと放課後を迎えました。

本当に展開が早いけど、そこまで意識するイベントも無く。

6時間目が終了。

無事、一日が過ぎようとしてました。

「俺ゲーセン行くけど、一緒にどうよ？」

「あ、ごめん……ちょっと用事が」

「ん、了解」

「また、誘って」

「あいよー」

教科書を鞆に詰め込んで、佐久間を教室に残して俺は教室を後にした。

ああっ……もうっ……。

帰りのホームルームから、ずっとズボンの中で携帯電話が絶賛振動中。

「学校に行ってる時は電話しないでって言ったのに……」

勘弁してほしいと言う気持ち抱きつつ、俺は校門の前まで走る。

「遅いわよ、ほら乗った乗った」

校門の前には丁寧にも送迎の車が停まっていた。

携帯の振動はストップ、目の前の女性が携帯電話を持っていることから

彼女からの着信だったと分る。

何度も見る光景……ああ、スケジュールの管理はもっと余裕を持って欲しい。

「息切れてるわね？ そんなので大丈夫？」

「大丈夫です……出してください」

「はいはい、じゃあ急ぐわよ」

運転手さん、まあ俺はこう呼んでいる女性が全力でアクセルを踏み轟音を立てながら車は発進した。

「にしても……その格好は色々思いつね」

制服姿の俺の格好を見てか運転手さんは苦笑を洩らした。色々とは……何を指しているのやら。

「この車ってスモークガラスでしたっけ……？」

「もちろんよ、ほら、髪痛む前に解きなさい」

俺は髪を束ねていたゴム紐を解き、纏まっていた髪を手グシでばらしていく。

「はぁ……」

「……………」

運転手さんはミラー越しに俺のを見た。

「……なんですか？」

「いや、ホント足して2で割ったみたい」

「みなさん、そう言いますよね……そんなに似てます？」

「そりゃもう、仕事モードの時と通常のギャップが……そっくり」
何故か運転手さんは優しく微笑んだ。

表情が安定しない人だなぁ……。

……………。

……。

さてと……

そろそろ素の自分に戻らなきゃね。

案の定、会場入りにギリギリで

運転手さんが関係者さんに渋い顔されてたけど……ね。

「またギリギリかよ……」

控え室に入ると同僚が呆れた表情でお出迎え。

「ごめんなさい、もっと余裕があると思っていたの」

「……まあ、あたしもさっき到着だから人のこと言えないか」

「互いに学校生活と共存は辛いわね」

「全くだ」

2人して苦笑する。

「準備は良いかしら？」

「こっちは何時でも良い、と言うか、あたしの出番は後だ、今日の
主役はあくまでもお前だろ？」

「それもそうね。なら、先に行ってくるわ」
「ああ、頑張れよ」

控え室からも聞こえる観客の歓声。
舞台袖で聞こえるMCの声

「続きまして、話題沸騰中のあの人!!」

少し今朝の出来事を思い出す。

でも、「こっち」は慣れているもの。

何も問題無い。

「鳳翔院雫による新曲『your daughter』お聞きください!!」

黄色い歓声が流れ込み
会場内に私の声は響いていく……

ええと、色々と慌ただしくてごめんなさいね。

とりあえず改めて自己紹介

名前は鳳翔院雫、生物学上性別は女。

職業は歌手と……本日、男子高校生始めました。

突拍子も無いプロローグ（後書き）

神沼 和人Ⅱかみぬま かずひと

鳳翔院 雫Ⅱほうしょういん しずく

筆者文才がヤヴァイ無いので色々文章が変です（涙）
なので、それなりに読み流す感じで読んでください。
真面目に読んでくれるともっと嬉しいですが……

早期更新を頑張りたいなあ

第1話「恋? そ、そんなこと無いわ…多分」(前書き)

うん、ギャグ路線。

第1話「恋? そ、そんなこと無いわ…多分」

所属事務所主催のイベントに

本日発売の新曲発表も兼ねての参加。

当初の予定では一度家に帰って

着替えるくらいの余裕があったと聞いていたのだけれど

スケジュールの前倒しなんて日常茶飯事で

いい加減慣れてきてしまった。

1曲歌い終わって舞台からさっさと退場。

もう帰って寝たい…けど、この後にも

新曲のCDを物販コーナーで販売があり

それと連動で何故か私の握手会もあるので帰れない。

「お疲れさん、やっと、あたしの出番か」

疲れ果てた表情のまま控え室に戻ると

事務所の同期、澤野さんが迎えてくれた。

「頑張って」

「誰かさんと違って既存曲だから、別に緊張もしねえよ」

やはり、気付かれていましたか

今回が2枚目のシングルの私に比べて彼女はベテランさん。

同期と言えども、デビューは私のがずっと後だしね。

彼女はちゃんと下積み時代もあるし…ぱっと出の私とは格が違う。

「でもま、ファンは着実に増えてんじゃないか？」

確かに曲にノってくれているお客さんは前回よりも多かったけど

「それなら良いけど」

どういう層が私のファンになるのだろうか

私は単に無愛想に曲を歌ってきただけだけどなあ……

男勝りでサバサバした性格の彼女みたく女子受けが良いわけでも無いし

むしろ私に女性ファンすら居るのか怪しい。

「ともあれ、外見で釣れるってのは大きいぜ」

「そりゃどうも」

最後に皮肉めいた言葉を残し彼女は控室を出て行った。

……………。

一通り、曲が終わってイベントもお開きムード。

結局、私は新曲のみのお披露目だったので楽だった。

大変なのは他のメンバーか……

何曲も出している人気な同期の面々はとっかえひっかえ出では入りの連続。

でも、私みたいな新米は物販コーナーで

言い方は悪いけど、地道にお客さんに媚びないと次が無い。

いくら、話題沸騰中とか言われようとも次に続かないのがこの職業。アンコールのかけ声と共に再び会場が盛り上がるのを憂鬱な態度でスルーするしかない。

「まあ、当然よね」

物販コーナーはガラガラである。

いや、アンコール終わればどっと人が押し寄せるのは知っているんだけど

チケット買ってまで来てくれた人達が途中で私のCDを買いに抜け出すとは思えない。

「ああ……完売しなかったら……どうしよう」

それこそ、お母さんに大目玉である。

そう、こんなことになったのも全部私の母親のせい

勝手に人の写真を事務所に送ったりするから

受けたくも無いオーディションを受ける羽目に……

「はあ……」

トントン拍子で採用が決まって：ちゃんと努力して歌手目指している人に申し訳ない気持ちでいっぱいだよホント。

「あの、すみません……？」

「!？」

マイナス方向へ意識がシフトしていた時不意に目の前にお客さん。

まだ、アンコールの真っ最中なハズなのにオカシイな

「その、サイン……して頂いてもいいですか……？」

お客さんの手には本日発売のCD購入者にのみ渡されるサインチケットが握られていた。

「ええ、構わないけど……まだイベント終わってないんじゃないかしら？」

仕事モードとか銘打っているけど

「キャラ作りをしろ」とか言われて、変にクールな口調を強制されているので

私は湿った気分の脳内を切り替えて、お客さんに問いかける。

「い、いえ、私のイベントは終わりましたから」

「？」

改めてお客さんを見ると

良いところのお嬢さんって感じの人がサイン色紙を片手に私に話しかけていた。

私が顔を上げると目があった、咄嗟に頬を赤く染め目を少し逸らした。

そんな仕草が中々可愛い。

背中まで伸びる長い綺麗な黒髪は良いね、良く手入れされていると見た。

ん？ デジャビュ？

「あ、あの……どうしましたか……？」

「い、いえ、別にどうもしないわ」

あ、あれえ…。

ほら、今日会ったよね学校で…えっと、隣の席の人見知りさん。キュキュキュとサインペンで色紙に本名を書いていく

サインなんて特別に考えていなかったの

で本名を達筆に描けば良いかなと言う安直な判断。

「あつ、ありがとうございますっ…」

私が書き終えた色紙を受け取ると

子供が欲しがっていた玩具を買ってもらった時の様な笑みを浮かべていた。

「こちらこそ、ありがとう。少し気分が晴れたわ」

いたよ、女性ファン…オカシイな。

こんな女のどこに魅かれたんだろうか？

あ、違う違う、魅かれたのは曲かな？ 多分そう。

一応、有名な人に依頼して作ってもらった曲だしね。

こんな私が歌っても良い曲になると思う。

「…嬉しいです」

ご満悦の彼女。

うん、とても可愛らしい。

初見時の印象がある分ギャップに萌えるね。

あつ…萌えてるのは…お父さんがよくちよく使う言葉で決して…決して私の意思じゃなくて…この気持ちを表現するのが一番手っ取り早い言葉だとか…

ああつ、もう自分でも何を言ってるのか分らないっ…!?

「えと、えと…すみません、お忙しいのに…」

「大丈夫よ、御覧の通り、まだ誰もお客さん来てないもの」
自分で言っただけで虚しくなる。

「…じゃあ一番乗りだったんですね私…」

「そういうことね」

何故か彼女はグッと拳を作り控えめなガッツポーズ。

「……………」

「あっ…」

私に見られていたのを思い出したのか

恥ずかしそうに、もう片方の手で拳を隠した。

「ええと……それ以上の仕草は危険な感じがするわ」

「？」

「いえ、こっちの話しよ……」

不思議そうに小首を傾げないで…ああっ…

キョトンとした表情に絶対萌えてなんかいないから！

オカシイ、絶対オカシイって…！！

私は女なのよ、ファンの彼女だって女。

そう女、だから……別にファンが出来て

しかも、会場が盛り上がっている最中に

態々、私の所にサインを貰いに来て

一番乗りってことを喜んだりしたからと言って

嬉しくないっ…嬉しくないんだからっ…

学校で隣の席だってことに運命なんて感じてないから！

ごめんなさい……今にも鼻血出そうです。

「あ、あの鳳翔院さん？ 大丈夫ですか…？」

「え…ああ…ごめんなさい、時々ね暴走するのよ」

「暴走？」

「ええ、これもこっちの話……」

恐るべし我が家のDNA……ってことにしよう。

「とにかく、ありがとう。正直、私に女性ファンなんて皆無だと思
っていたから」

「そうなんですか？ 私は鳳翔院さんはとても魅力的だと思います」

断言、いや、それ本人の前で言うのってかなり度胸要と思うけど

……

「え……」

「……クールでカッコイイです」

うっ……。

い、言えない……クールはキャラ作りとか絶対に……。

そして若干頬を朱に染めながら言う破壊力は3倍。

癖なの！？　ねえ、その私の萌えゾーンを狙いつた仕草癖なのっ！？

っと……いけない、これじゃ話しが進まない。

でも、これはタレントさんとかがイメージを保つのに苦勞するのと同じ感覚なのだろう。

あくまでも歌手としての私のキャラクターを好きになってくれたのだから。

喜ばしいこと……うん。

「あ、そろそろ時間ですね、会場の方も終わったみたいです」

「そうみたいね」

気がつくとき、さっきまでの会場の騒がしさが消えていた。

「最後にお名前を教えてもらってもいいかしら？　記念すべき最初の女性ファンとして覚えておきたいの」

「えっ……いいんですか……？」

「もちろん」

忘れるものか、この一分一秒を……！　ってお父さんなら言いそう。

「小葉月……夏樹です……小さい葉っぱの月に、季節の夏と樹木の樹です……」

おk、把握。　なんだろう？　お父さん語録便利。

「夏樹ちゃんね、覚えてたわ。これからも応援お願いね」

「はい、もちろんですっ……！」

ぺこりとお辞儀をして彼女は去って行く。

そんな後姿を見えなくなるまで目で追ってしまったのはナイショ。

「夏樹ちゃんかぁ……可愛い子だったなあ……」

気分はすっかり上機嫌。

その後のサイン会に野郎ばかりが来たとしても問題無いくらいに「親に負けなくらいのダメ人間っぷりが露見してきたな……」

ポンと肩を叩かれた、隣を見ると運転手さん。

「い、いつから居たんですかっ…!？」

「悪い、最初から見えた」

「ええっ…!？」

見られてたと言うのか…:

あ、でも脳内は見られてないから大丈夫♪

「君は今！ 変態への一步を踏み出したのさ」

「どっかのリーグ近辺に居る人みたいなこと言わないでください！
！」

へ、変態じゃありません！

だ、断じて…ええ、女の子が女の子を可愛いと言って何が悪いんですか…!

「ツツコミのベクトルが似通ってきたなあ…」

ボソツと口にした運転手さんは少し嬉しそうだった。

「あ、でも私が男の格好だったら、可愛いと言っても大丈夫かな…?
」

「捕まるから止めとけ」

「うう…じよ、冗談ですよ」

ちよっと本気だったけどね。

1人のファンでこんなにもテンションあがるなら、歌手も悪く無い
かも知れない。

まあ、数分後、あまりにも人が来なくてヘコむんですけどね…:
話題沸騰中…って言ったのに…:

第1話「恋? そ、そんなこと無いわ…多分」 (後書き)

小葉月 夏樹Ⅱこはづき なつき

とりあえず、ギャグ路線。

駄文ですが読んでくださると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8077o/>

Metamor

2010年11月10日02時14分発行